

西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業（セ05-06-1/5）

目 的

西アジア諸国、とくに紛争後にあるアフガニスタンやイラクの文化遺産の調査研究を行うとともに、文化遺産の保存・修復を支援し、関係する技術の移転を図り、当該国における専門家育成を行う。また、あわせて周辺地域の文化財調査研究を実施し、西アジア諸国等における文化財の保存協力事業に役立てる。

成 果

1. アフガニスタン（パーミヤーン）

第6次ミッション（2006年6月19日～7月14日）及び第7次ミッション（2006年9月11日～10月16日）をパーミヤーンに派遣し、パーミヤーン遺跡の保存修復事業を実施するとともに、アフガニスタン人専門家の人材育成を行った。

（1）アフガニスタン専門家研修事業

・第6次ミッション及び第7次ミッションで実施したパーミヤーン遺跡の考古学的調査、建造物調査、仏教壁画の保存の各プロジェクトにおいて、アフガニスタン人専門家と常に共同で作業を実施することによって、現場で人材育成、そして技術移転を実施した。

・「保存修復ワークショップ」を、2006年10月4日～10月8日にかけてパーミヤーンにおいて開催した。国立カーブル博物館、ガズニー博物館、カーピーサー博物館、パーミヤーン博物館準備室から計6名の専門家が参加し、壁画の保存に関する理論及び実技の研修を行った。

（2）パーミヤーン遺跡の考古学的調査

文化的及び考古学的地区と保護されるべき考古遺跡を特定し、地域開発による破壊からこれらの文化遺産を護るために、これまで遺跡の分布調査を実施するとともに、地下探査及び試掘調査を行っている。第6、7次ミッションで実施した試掘調査はこうした活動の一環であり、これまで知られていない埋蔵文化財の存在を確認することを目的としている。試掘調査の対象とした地区は、タイプティー地区、ガリーブ・アーバード地区、ガーズイー・ダウティー地区、そしてジューイ・シャフル地区の4つの地区である。調査の結果、仏教石窟群の南に広がる緩斜面、シャフリ・ゴルゴラの周辺には、これまで知られていない埋蔵文化財が存在していることが明らかとなり、今後の遺跡保護のための基礎的な情報を得ることが出来た。

（3）パーミヤーン遺跡の建造物調査

平成17年度に実施した予備調査に基づき、パーミヤーンの遺跡と景観を構成する仏教石窟群の全体的な保存状況把握のための調査、保存計画及び安全性評価の前提となる石窟の現状調査、そして石窟配置、意匠、伝統的技術、編年に関する建築史的調査を行った。とくに、石窟の配置に関しては、階段や石窟の配置等の検討を通じて、石窟群のこれまでのグループ分けとは異なる新たな見解を得ることが出来た。

（4）パーミヤーン仏教壁画の保存

パーミヤーン遺跡では、内戦及びその後の混乱の時期に多くの壁画が破壊されてしまったが、依然として壁画が残されている石窟も存在しており、これまでは壁画の保存のためにさまざまな緊急かつ予備的な活動を実施してきた。本年度からは本格的な壁画保存修復作業に着手することとし、パイロット事業としてI窟、N(a)窟において、壁画の剥落止めや黒色物質のクリーニングといった壁画の保存修復を実施した。クリーニング作業の過程では、黒色物質の下から、当時の色合いを残した色鮮やかな壁画が発見されており、パーミヤーン仏教壁画研究の貴重な資料が得られた。

（5）「パーミヤーン遺跡保存に関する第5回専門家作業グループ国際会議」への参加

2006（平成18）年12月14日～16日にかけてドイツのアーヘン大学で開催された同会議に参加し、パーミヤーン遺跡保存に関して情報収集をするとともに、今後の方針について各国の専門家（アフガニスタン、

ドイツ、イタリア、フランス）と意見交換を行った。文化財研究所からは稲葉信子、山内和也、谷口陽子、前田耕作（東京文化財研究所）、森本晋（奈良文化財研究所）が参加した。

（6）『アフガニスタン文化遺産調査資料集』の出版

平成 19 年はアフガニスタン文化遺産調査資料集の第 2 巻目（英語版）にあたる *Radiocarbon Dating of the Bamiyan Mural Paintings*、第 3 巻目の『アフガニスタン流出文化財の調査 バーミヤーン仏教壁画の材料と技法』（日本語版）及び *Study of the Afghanistan's Displaced Cultural Properties, Materials and Techniques of the Bamiyan Mural paintings*（英語版）を刊行した。本事業は、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成を得た。

（7）バーミヤーン仏教壁画の年代測定

アフガニスタン情報文化省の協力の下、名古屋大学年代測定総合研究センターと共同で、仏教石窟内に残された仏教壁画の下塗りに含まれている藁スサを用いて放射性炭素年代測定法による年代測定を、平成 16 年度から継続して実施している。

2. イラク

イラクのバグダード国立博物館には、メソポタミア文明の発祥の地であるイラク国内で発見された貴重な遺物が数多く収蔵されていたが、イラク戦争及びその後の混乱のさなかに、それらの収蔵品の多くは破壊、あるいは略奪されてしまった。また、重要な遺跡の多くも盗掘等によって甚大な損傷を被っている。さらに引き続く政治的な混乱のために、こうした文化財を保護する専門家のみならず、文化財の保存・修復に関する知識や経験も失われつつあることから、本プロジェクトでは、イラク人専門家の人材を育成し、イラク人自身による文化財復興を支援することを目的としている。

（1）イラク文化財専門家研修事業

現時点では治安が安定していないため、現地における文化財保護に関する支援を実施することは困難であることから、バグダード国立博物館等から専門家 2 名を日本に招聘し、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、静岡県埋蔵文化財調査研究所で、機器の取り扱い、考古遺物の保存修復の理論と実践に関する研修を実施した。なお、本研修事業は、ユネスコ日本信託基金によるイラク博物館における修復研究室復興プロジェクトとタイアップして実施されている。

研究組織

青木繁夫、稲葉信子、山内和也、朽津信明、岩井俊平、岩出まゆ、宇野朋子、谷口陽子、西山伸一、関博充（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、大竹秀実（以上、客員研究員）、岡村道雄、井上和人、窪寺茂、森本晋、石村智、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）、中村俊夫（名古屋大学）



2006 年第 7 次ミッションにおける壁画片の保存処理に関するワークショップ